



第1分科会

「コミュニケーション教育の現在—2020年大学入試改革を見据えて—」

平田 オリザ 氏

(劇作家・演出家・青年団主宰)



・こまばアゴラ劇場芸術総監督
・城崎国際アートセンター芸術監督
・一九六二年東京生まれ
・国際基督教大学教養学部卒業
■主な著書
『演劇入門』(講談社現代新書)

第1分科会では劇作家・演出家の平田オリザ先生を招き、ワークショップを取り入れた講義が行われた。コミュニケーション能力ということが大きく取りざたされている現在、そこで問われているコミュニケーション能力とは何か、学校現場でそれを教える意味は何か、ということを演劇という分野からの視点も交えてお話しいただいた。

講義のはじめに行われたワークショップでは、参加者の内二十名が七つのお題に取り組んだ。内容は小学生向けの簡単なもので、お題によって参加者内でグループに分かれるというものだ。「好きな色」や「兵庫県と聞いて思い浮かべるもの」というお題からスタートし、次に「今行ってみたい国」や「誕生月」というお題が出された。ここではコンテクトベースからパーソナルベースへとすることが考えられており、次第に出題者と参加者がコミュニケーションを取りやすくなるように出題内容が工夫されていた。問題構成のバランスが非常に重要で、それによって子どもの取り組み状況も変わるということをお聞きした。「番号付きカードに書かれた役柄を演じる」という演劇的な要素を持つお題でワークショップは終了した。活動を通して、同じ言葉でも一人一人の持つイメージには違いがあり、どんな「つもり」でその言葉を使っているのかを共有し合うことが大切だということを体感した。

その後、二〇〇二年に中学校の教科書として採択された平田先生の教材で講義いただいた。ここでは演劇教室での視点と普段の授業の視点が大きく違

うということを学んだ。例えば、セリフを作るという学習内容では、黙っている、寝ている、その場にいらない、という話さない(登場しない)ことも表現の一つであり、そのことに気づかせることも大切だと学んだ。また大学入試改革については、生徒を選抜する試験から生徒の本質を見極める試験へ、という提唱を伺った。これまでは知識量を問うていたが、これからは共同体を作るための試験に代わっていき、「何を学ぶか」ではなく「誰と学ぶか」が重要視されるようになり、いろんな人材を大学は確保しようとしている。そのためにも多様な考えを持ち、それを表現できる力を育てていかなければならないが、そのために重要な身体的文化資本の格差が地域格差や経済格差と相まって広がっている。これをどうにかしなければならぬ、という課題やそれに取り組んでいる自治体の例もお話しいただいた。

最後に、子どものコミュニケーション能力は実際には低下していない。一方で求められる能力は増え、子どもを取り巻く環境はコミュニケーション不要の場面が増えている。そのような中で、求められる力と実際の能力の差を補うことができるのが学校現場しかない、という話を伺った。コミュニケーション教育となると言語活動というだけで国語科だけが負担しがちであるが、全校で取り組む課題であり、そのことを認識しなければならぬと言っていた。

全体を通して、普段の学習活動にはない視点にたくさん気づかされ、活動からも講義からも新しい視点をたくさん学んだ。

